

接辞性字音語基の造語力 -「者」「家」「人」を対象として-

曾 睿

キーワード: 接辞性字音語基、造語力、「者」、「家」、「人」、特質構造

要 旨

造語力が高く見られる接辞性字音語基「者」「家」「人」の三字漢語における特徴を考察することにより、造語力の高い原因を探る。本稿では、まず接辞性字音語基を実際の語例における意味により分類した。また、それぞれの意味において、前項語基との意味関係をクオリア構造で分類した。その結果、三字漢語における意味解釈が多く見られる接辞性字音語基が前項語基との意味関係のバリエーションも豊富であり、それが、接辞性字音語基の造語力が高い原因であることがわかった。

1. はじめに

漢語複合語を構成する形態素は一般的に字音形態素といわれている。野村(1973)によると、三字漢語は漢語複合語全体の中で重要な存在である。さらに、三字漢語は基本的に「二字漢語+一字漢語」と「一字漢語+二字漢語」のような形であり、前者は三字漢語の中で多く占めていると分かる。筆者の考察に利用した山下(2008)¹のデータも同じ結果を示している。その中で、後項である一字漢語の中には、語構成能力と意味の実質性などの点から語基であるか接辞であるかを判断しにくい場合が多い。たとえば、「者、家、人」などのような字音形態素は形態上ではそれ自身で語を構成することができない。また、意味的には複合語の重要な意味を担うが、「研究者」は「研究を専門とするひと」のように、「者」は接辞的な機能も担うとみられる。さらに、それらは造語力が高いことが特徴であり、野村(1978)では、このような字音形態素を「接辞性字音語基」と呼んでいる。

このように三字漢語の後項となる接辞性字音語基の造語力が高いこともデータから顕著に見られ、なぜ接辞性字音語基の造語力が高いのかは、それらが表す意味と深く関わっていると考えられる。そのため、造語力と接辞性字音語基の意味における関係は複合語の語形成を考察する際に興味深い問題である。三字漢語を出発点として、

後項になる接辞性字音語基が三字漢語を形成する際どのような意味を担っているか、そしてその造語力が高い原因は何かを探ることが重要な課題である。

そこで、複合語のデータを作成するため、本稿では、山下(2008)の中の「合成語データベース」から三字漢語の収集作業を行った。

上記のデータでは、後項になる接辞性字音語基の中で、「ひと、人間」という意味を表すものが構成する三字漢語の異なり語数は上位10語の中で、三つも占められている。そこで、本稿は「者、家、人(じん)」を典型的な例として考察する。

2. 先行研究

今回分析対象となる接辞性字音語基が表す意味概念は大きく考えると「人間」を表すものである。それらが構成する名詞は宮島(1997)では「ヒト名詞」、影山(2002)では「動作主名詞」と呼ばれている。

宮島(1997)では、多くのひと名詞は何らかの動作と関係を持っているとされ、その際の関係を「実現のシテ」、「潜在的なシテ」、「経験者」、「一定の状態にある者」四つに分けている。

宮島(1997)に基づき、影山(2002)では、「音楽家、翻訳家」のような「-家」は役割、職業など恒常的な性質を表す個体解釈名詞が多く、「欠席者、旅行者」のような「-者」はその場でしか成り立たない一時的な性質である事態解釈名詞が多いといった傾向が認められるが、「-者」でも「(オーケストラの)指揮者」は個体解釈であり、また、「-家」でも「倹約家、浪費家」のように事態解釈と思われる例も存在すると述べている。そこで、特質構造(次節参照)の観点から、「家」と「者」は同じく「人間」という意味に属し、目的役割²を表すか主体役割を表すかによって、複合語全体が「個体解釈名詞」であるか、「事態解釈名詞」であるかが決まると指摘している。例えば「作家」の形式役割は「人間」であり、目的役割は「x(人間)が文学作品を書く」ということである。それに対して、「作者」の形式役割は「人間」であり、主体役割は「x(人間)がある文学作品を書く」のである。したがって、影山(2002)による「作家」は個体解釈名詞で、「作者」が事態解釈名詞であることが「人間」の目的役割か主体役割かを区別する解釈と異なる視点から分析した。このように、複合語の意味関係と統語関係を考える際に、特質構造の利用は有効であることがわかる。そのため、本稿の考察も特質構造を援用する。

ただし、これまでの先行研究では、すべての「人間」を表す語彙を対象としているが、「人間」の意味を表す接辞の特徴に関する考察はまだ不十分である。筆者は接辞性

字音語基の造語力を考察する重要な一環として、本稿では「者」「家」「人」を接尾辞とする「三字漢語」に絞って、考察する。また、「探検家」と「探検者」は同じ人間であるが、前者は「個体解釈」、後者は「事態解釈」となる。それらを説明するには、接辞性字音語基とそれに接続する要素を詳細に分析し、それぞれの特徴を明らかにする必要がある。

3. 考察

3-1. 「特質構造」とは

Pustejovsky (1995) は名詞の意味的特性をさらに詳しく検討し、特質構造という表示を提案している。影山(1999)、小野(2005)は特質構造に関して、詳しく紹介している。特質構造というのは、基本的にはモノの性質を表すもので、「構成クオリア、形式クオリア、目的クオリア、主体クオリア」の四つの要素から成り立っている。

複合語の内部にある意味論的關係と外部にある統語関係には深い関連があり、漢語の場合は特にそうである。例えば、「参加者」の形式クオリアは「人間」であり、主体クオリアは「人間が主体的にある事態に参加する」のである。ここでは、形態上では後項である「者」は形式クオリアを表し、前項の「参加」は主体クオリアを表出すると捉えられる。つまり、三字漢語の構成において、形態上では単なる修飾関係であるが、実は内部の意味関係に深くかかわっている。

そのため、接辞性字音語基の生産性を考える際に、形態上における制限よりも内部における意味関係を考察すべきであるとわかる。そこで、本稿は接辞性字音語基と前項となる語基の意味関係をクオリア構造で分析する。

さらに、今回の分析対象となる接辞性字音語基が構成する三字漢語(いわゆる動作主名詞)に関してはこれまでの先行研究で様々な意味分析が行われてきた。ただし、筆者は接辞性字音語基の造語力を考察する際に、このような動作主名詞と言われる三字漢語を構成する「者、家、人」が構成する三字漢語の異なり語数が今回のデータでは上位10語にあり、造語力が高いと評価できる基準に満たすことがわかった。そのため、これまでの先行研究の成果を活かし、このグループに属する接辞性字音語基の造語における特徴を明らかにする。

クオリア構造に関しては、本稿では、まず、Pustejovskyの説明を引用し、説明する。このクオリア構造は詳しくみると、以下の四つに分けられる。(Pustejovsky 1995: 76)

- a. 構成クオリア: 物体とそれを構成する部分の関係
- b. 形式クオリア: 物体と他の物体から識別する関係
- c. 目的クオリア: 物体の目的と機能
- d. 主体クオリア: 物体の起源や発生に関する要因

クオリア構造は生成語彙意味論の一つの大きな特徴として、意味の表示と生成の仕組みを説明する。だが、複合語の意味関係の分析には今まで用いられることが少なかった。影山(2002)では、複合語全体の統語構造に対して持つ外的な関係を考えるために、特質構造を利用した。ただし、統語構造と形態、意味には深い関連があり、複合語の形成において、形態上の特徴はそれを構成する語基の意味と統語を離れて考えるわけにはいかない。接辞性字音語基は形態上様々な語基と接続できる。そのような現象は接辞性字音語基の複合語における意味や前項との統語関係を配慮しながら考えるべきである。

そのため、複合語基と接辞性字音語基の意味関係の分析にクオリア構造を導入するが、本稿では、複合語基が接辞性字音語基の表す事象のどのようなクオリアを説明するかという視点から考えるため、クオリア構造の四つのクオリアを次のように解釈する。

- ①形式クオリアを示す: 前項となる複合語基が後項となる接辞性字音語基の様式を説明する。つまり、前項は後項が「どのようなものであるか」を表す。これは従来の形式クオリアと異なる。例えば、従来は「車」と「者」を区別するには、「人工物」と「人間」をそれぞれの形式クオリアと考える。しかし、本稿においては「科学者」と「文学者」の「者」を区別するには、「科学」と「文学」がそれぞれ「者」の違う形式クオリアを表すと考える。
- ②目的クオリアを示す: 複合語基が接辞性字音語基の用途、目的を説明する。つまり、前項は後項が「何のためであるか」を表す。
- ③構成クオリアを示す: 複合語基が接辞性字音語基の内部構成を説明する。つまり、前項は後項の「なにからできているか」を表す。
- ④主体クオリアを示す: 複合語基が接辞性字音語基の主体を説明する。つまり、前項は後項が「どうして生じたのか」を表す。

本稿におけるクオリア構造は影山および従来のものと基本的には同じだと考える。ただし、影山(2002)は、「探検家」「利用者」「通行人」の形式クオリアが全てに「人間」を表すと考えるが、三字漢語における接辞性字音語基の意味を考える際に、「家」

は単なる「人間」を表すのではなく、「あることを専門あるいは専攻とする人」という意味を持つことは明らかである。このように考えると、接辞性字音語基「家」には影山が言う形式役割と目的役割両方が含まれていると考えられる。それに対して、「者」は単なる「人間」しか表せず、「家」は影山が言う「形式役割」しか表せないことになる。つまり、どちらも同じ「人間」という意味を表すが、接辞性字音語基としては三字漢語の中では違う意味を表すのである。

本稿では、クオリア構造を考える際に、前項が後項のどのようなクオリアに表すかに注目する。そのため、前項複合語基と後項となる接辞性字音語基との修飾関係を意味的な面から詳しく考えると、「研究家」と「音楽家」では、前項の「研究」と「音楽」とが「家」の別の形式クオリアを表すと考えたほうが妥当であると思う。

また、「消費者」の主体クオリアは「人間は商品サービスを消費する」のであり、前項「消費」は後項「者」の主体クオリアを表すと解釈する。このように、主体クオリアに関しては、本稿では前項複合語基は接辞性字音語基が「どうして生じたのか」を表すと考えることにする。

3-2. 「者、家、人」に関して

まず、「者、家、人」の三字漢語の中における意味概念を考える。「者、家、人」は「人間」を表す意味概念であるが、同一ではない。そこで、実際に三字漢語の意味を考察しながら、接辞性字音語基の意味を検討する。

「家」は接辞性字音語基として、すでに特定の意味概念を有するもので、ただの「人間」という意味を表すのではなく、「ある分野に専業する/ある職業をする人間」という意味概念が付与されている。つまり、「家」は「人間」の下位概念と言える。「者」と「人(じん)」は基本的に「人間」という意味であり、前項との意味関係で意味が決定される。

3-2-1. 「者」

今回のデータにおける「者」と前項複合語基との関係によって、以下の六つに分けられる。

1) ~を有する人

このグループに属する「者」は前項との関係が所有関係であり、何かを所有する「者」となる。つまり、前項が表す意味概念が「人間」という「者」の所有物。ここで、筆者

は前項は接辞性字音語基の「主体クオリア」を表すと考える。

容疑者 関係者 障害者 責任者 技術者 主義者 実力者 初心者 身障者
婚約者 人格者 知恵者 霊能者 信仰者 子福者 分限者 刑余者 被害者
被災者 被爆者 受刑者 被疑者 被用者 許婚者

2) ～をする人

このグループに所属する三字漢語において前項は「者」の主体的に行う動作である。「人間はどのような動作を行うか」という意味である。ここでも、前項は「主体クオリア」として機能する。

消費者 担当者 指導者 経営者 参加者 所有者 利用者 労働者 保護者
挑戦者 視聴者 加害者 代表者 主催者 編集者 生産者 管理者 入居者
指揮者 出演者 納税者 協力者 目撃者 犯罪者 歩行者 使用者 旅行者
独裁者 解説者 居住者 雇用者 出資者 研究者 教育者 創始者 依頼者
預言者 支配者 継承者 侵入者 創立者 傍観者 侵略者 購読者 傍聴者
開拓者 統治者 征服者 浮浪者 反逆者 労務者 専従者 服役者 扇動者
案内者 崇敬者 放浪者 助演者 記述者 代打者

3) ～である人

このグループに属するものの前項は「者」の様態を記述する。ここでは、前項は接辞性字音語基の形式クオリアを表すと判定する。ここでは、前述したように、影山説によると「主体クオリア」を表すことになるが、筆者は前項と接辞性字音語基との接続における意味関係においては前項が接辞性字音語基の「形式クオリア」を表すと考える。

有権者 負傷者 有識者 為政者 保菌者 有段者 求道者 当局者 当事者
後継者 配偶者 首謀者 健常者 同業者 部外者 独身者 同伴者 難聴者
同調者 既婚者 未婚者 主導者 先覚者 先導者 需要者 先行者 妻帯者
局外者 著作者 出身者 聖職者 先駆者 前任者 後援者 異端者 後任者
新任者 初学者 失業者 強打者

4) 特定の分野に努める人

何かを研究する「者」となる。影山(2002)では、「者」の形式役割は「人間」だと述べた。しかし、ここではほかの者と区別する属性を述べている前項は「者」の「形式クオリア」を表すと考えられる。

科学者 文学者 儒学者

5)ある状態となった人間

このグループでは、前項は経験および状態を表す。前項は接辞性字音語基の「主体クオリア」として機能する。

犠牲者 死傷者 生存者 死亡者 戦死者 殉教者 失明者

6)一定の特質を有する人間

このグループに属する語の前項も接辞性字音語基の「主体クオリア」を表す。

勤労者 愛国者 芸達者 変質者 偽善者 熟練者 絶対者 崇拜者

以上の実例を考えると、「者」は「人間」という意味を表し、その「ヒト」がどのような人であるかは前項となる複合語基の意味で決まる。「者」の三字漢語の構成における特徴として以下の二点が顕著に見られる。

まず、1)と2)では前項は「者」が行う主動あるいは被動的な動作を表すため、「主体クオリア」を表すことが明らかである。筆者は従来と異なり、「者」は「人間」という「形式クオリア」を表すが、3)と4)の前項は基本的に接辞性字音語基の様態、状態及び特質などを説明するため、ほかの「者」と識別する形式クオリアとして機能すると考える。5)と6)では前項と「者」とは所有関係であり、主体クオリアを表す。ここで、「形式」と「主体」を分ける一つの基準は、形式クオリアは前項が「者」の特徴を表し、三字漢語それぞれの意味を区別することであり、主体クオリアは「何を有するか」という所有関係を表す。ただし、その間に、重なりがあり、両方とも考えることが可能である。

また、「者」には「人間」という意味を表すが、実際の三字漢語の中で、前項との意味関係により様々な解釈が得られることが分かった。また、前項が基本的に主体クオリアと形式クオリアを表す。そこから、接辞性字音語基「者」の造語力が高くなると考えられる。

3-2-2. 「家」

1)ある分野に専業する/ある職業をする人間

このグループに属する前項となる複合語基が専門分野を表し、「家」の「形式クオリア」を記述する。

政治家 評論家 写真家 作曲家 建築家 漫画家 音楽家 演出家 芸術家
落語家 小説家 劇作家 彫刻家 美術家 法律家 批評家 歴史家 運動家
思想家 登山家 陶芸家 翻訳家 声楽家 宗教家 文芸家 革命家 格闘家

書道家 発明家 随筆家 文筆家 美食家 教育家 箏曲家 著述家 文章家
 技術家 外交家 社交家 拳闘家 策謀家

2) 何かを有する人間

このグループに属する三字漢語の前項は「家」と所有関係になり、前項が「家」の「主体クオリア」を表す。

専門家 起業家 実業家 企業家 資産家 事業家 資本家 銀行家 名望家
 素封家 財産家 金満家 経世家

3) ある嗜好を有する人間

このグループに属する語の前項は「家」の「主体クオリア」を記述する。

活動家 愛好家 収集家 努力家 愛犬家 愛煙家 探検家 実務家 理論家
 野心家 篤志家 楽道家 愛妻家 漫談家 好角家 夢想家 好事家 恐妻家
 理想家 陰謀家 儉約家 実際家 発展家 不平家 勤勉家

「家」は1)の意味解釈に属する語が圧倒的に多いことがわかる。これが「家」の基本的な意味と考えてもいい。影山(2002)では「一家」と「一者」が表すクオリア構造が異なることを、個体解釈となるか事態解釈となるかを判断する基準としている。影山説に従うと、1)に属する「一家」はすべて目的クオリアを表すことになるが、本稿では目的クオリアが「家」の意味に含まれているため、前項が「家」の形式クオリアを表すと考える。この分類は影山説の反論ではない。ただし、影山(2002)の個体解釈と事態解釈に関する分類は、三字漢語の場合、その区別は三字漢語のクオリア構造が違うというより、接辞性字音語基が表す意味が異なるためと考えた方が良いのではないかと思う。

3-2-3. 「人(じん)」

1) ある身分(所属)を有する人間

このグループでは、前項は「人」の形式クオリアとして記述される。

日本人 外国人 中国人 米国人 韓国人 英国人 欧米人 宇宙人 縄文人
 東洋人 西洋人 都会人 古代人 異邦人 異星人 火星人 原始人 未来人
 渡来人 帰化人

2) ある特徴を有する人間

このグループに属する三字漢語の前項も「人」の形式クオリアを記述する。

社会人 民間人 現代人 知識人 著名人 芸能人 有名人 文化人 財界人
 経済人 一般人 未亡人 職業人 読書人 自然人 公法人 風流人 未開人
 一流人

以上のように、「者、家、人」の前項となる複合語基を考察した結果、「者」は基本的に「人間」の意味を表し、主に、「ある動作、所有関係」などのような構成における関係を有する。「家」は「ある専攻分野/嗜好を有する人間」を意味する。「人(じん)」は人間というより「人類」の意味で考えたほうが妥当ではないかと思われる。

また、「人」に接続する語基が基本的に「人間」が属する領域を表す。「生まれた土地、身分(所属する国、職業など)」のような具体的な枠を規定するものが多い。「家」と「人」の前項は形式役割を記述するのがほとんどであり、「者」には主体役割が多くみられた。それでも、「者」は意味解釈のバリエーションが最も豊富であるとわかった。また、今回のデータでは「-者」の異なり語数が134語であり、「家」の83語と「人(じん)」の41語より圧倒的に多くみられたので、造語力が最も高い。そこから、意味概念のバリエーションがより豊富な接辞性字音語基が高い造語力をもつといえる。

4. まとめ

筆者は「者、家、人」は「人間」を表す意味概念とすることを認めた上で、三字漢語における実際の語構造の中では、意味概念が限定され、元の「人間」の意味から自ら独特の意味カテゴリーを有するようになったと考える。この点に関しては、宮島(1997)影山(2002)のような三字漢語全体を対象とする処理方法と異なり、構成に当たる造語成分を前項と接辞性字音語基に分けて、意味概念を分類したうえで、意味概念関係の分析を行った。その結果から、それら三つの接辞性字音語基は語構成による特徴が違っていた。

まず、接辞性字音語基が表す意味が造語に対する最も重要な要因とわかった。同じ人間の意味を表す接辞性字音語基は、三字漢語の構成にはそれなりの意味役割を担っている。ヒト名詞という共通性を有するとともに、それぞれ特別の意味概念を有するため、接続できる前項も多様である。「者」は前項との意味関係のバリエーションが最も豊富であり、調査データにおいて異なり語数も最も多い。「家」は「者」に続き、「人」は一番少ない。

より詳しく考えると、同じ「人間」を表す接辞性字音語基であるが、実際の語形にお

ける意味解釈は「人間」の下位意味概念に属すると言える。接辞性字音語基の表す意味が異なることにより、前項が機能するクオリアも異なる。ただし、「者、家、人」は同一のものではない、「者」には形式クオリアと主体クオリアの構成における意味概念関係がみられる。「家」は「ある分野に専業する/ある職業をする人間」のようなより具体的な意味概念を表し、形式クオリアが多い。それは、「家」自体に「専門/嗜好を有する人」という意味派生が生じたため、目的クオリアが「家」自体に含まれ、複合語を構成する際に、前項が形式役割を記述するようになったと考える。この点に関しては、今回の考察では、三字漢語のクオリア構造を前項と接辞性字音語基との意味関係に用いて考察した。確かに従来の分析法と異なる部分はある。特に、「家」と「者」の相違から考えると、接辞性字音語基自体の意味概念にはクオリア構造が存在することが可能であるとわかった。前項となる語基がどのようなクオリアを記述するかは接辞性字音語基が表す意味概念に深く関わる。

また、造語力が強くみられる語基にはクオリア構造も多様に見られた。「者」と「家」には形式クオリアと主体クオリアがあるが、「人(じん)」には形式クオリアしか見られない。

以上から分かるように、造語力の高低に影響する要因としては、一つは接辞性字音語基の複合語における意味の豊かさであり、もう一つは前項語基との意味関係の多様性である。前者はまた後者に影響することも分かった。

5. 今後の課題

今回は「者、家、人」が人間を表すヒト名詞を分析した。それらが接辞性字音語基全体においてはどのような位置づけとなるのかを把握するために、さらなる考察が必要である。それに関して、より語彙量が多いコーパスを利用することが重要である。また、「家」は「人間」という意味のもとで、より狭い意味概念が付与されていることが明らかである。¹⁾「ある分野に専業する/ある職業をする人間」という意味は「専門家」という語の省略語とも考え得る。このような現象は「車」³⁾にも見られる。それは、一つの意味を接辞性字音語基を代表する典型的な意味概念とし、プロトタイプ的な意味であるとするものである。このような類型化も今後の課題にしたい。

注

¹⁾ このデータベースは平成17年から19年にわたり、7種類の国語辞典、『分類語彙表増補改訂版』(2004)、『日本語能力試験出題基準語彙表』の中から接辞や造語成分を抽出し、これらを基に「造語成分データベース」

を作成したものである。その次に、データベースにある造語成分を含む合成語を『分類語彙表』から抽出して、「合成語のデータベース」を作成した。また、『出題基準』に基づき合成語を分類した。さらに、「合成語データベース」に情報付作業を行い、新聞とWEBを資料として合成語の出現頻度調査を行い、データベースを完成させ、CD付の報告書にまとめている。CDは「造語成分データベース」と「合成語データベース」に分けられる。「造語成分データベース」には、造語成分見出し語、表記、接続、語種、語例、資料出現頻度、各資料採録状況を載せている。「合成語データベース」では、合成語見出し語、よみ、品詞、語種、(中略)接続、造語成分、造語成分よみ、(後略)がある。

²「構成クオリア」とも言う。影山(2002)では「特質構造」といい、本稿では、「クオリア構造」という。

³「車」に関する分析は曾(2013)を参照されたい。

参考文献

- 小野尚之(2005)『生成語彙意味論』くろしお出版
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(2002)「動作主名詞における語彙と統語の境界」『国語学』第53巻1号
- 影山太郎(2008)『属性叙述と語形成』『叙述類型論』くろしお出版
- 曾睿(2013予定)「三字漢語における接辞性字音語基の意味と造語力」日本語学会2012年度秋季大会発表要旨『日本語の研究』第8巻2号
- 野村雅昭(1973)「複次結合語の構造」国立国語研究所『電子計算機による国語研究V』秀英出版
- 野村雅昭(1974)「三字漢語の構造」国立国語研究所報告『電子計算機による国語研究VI』秀英出版
- 野村雅昭(1978)「接辞性字音語基の性格」国立国語研究所報告『電子計算機による国語研究IX』秀英出版
- 水野義道(1987)「漢語系接辞の機能」『日本語学』第6巻2号
- 宮島達夫(1997)「ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス」『日本語文法体系・方法』川端善明・仁田義雄編 ひつじ書房
- Pustejovsky, James. 1995. The generative lexicon. MIT Press
- 山下喜代(2008)「日本語教育のための合成語のデータベース構築とその分析」『平成17年度～19年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書』DTP出版